

# 大学生の環境意識に関する調査研究

## — 環境教育と食育に関する一考察 —

今井良一

### はじめに

本稿の課題は、日本人の食生活の改善が、健康改善だけではなく、国土環境の保全にいかにつながるかということ、日常生活で、学生がどれほど認識し、それをどれだけ実践しようとしているのか、また実践できないとすれば、それはなぜかを明らかにすることによって、今後の環境教育のあり方について考察することである。

食生活の急激な変化に伴い、生活習慣病の低年齢化やアレルギー疾患の増加などの問題が指摘される一方で、輸入農水産物が氾濫（食料自給率が低下）し、国内農業は衰退している。

健全な心身育成のためには、望ましい食習慣を身につけ、安全で安心な食品の選び方や食べ方を知ることが望まれる。学生は「食」に対してどのように考え、行動しているのか。調査結果を分析することによって考察する。

### 1. 調査の対象と調査内容

本稿執筆に際し、2014年9月26日（金）に、集合調査による自記式の無記名質問紙を用い、兵庫県内のT大学の学生を対象に、「関心の高い環境問題」、「食生活の実態」、「食の安全性」などに関する調査を行なった。

計126名の協力が得られ、本稿では、そのうち最も大きな集団である自宅通学生81名（男子学生56名・女子学生25名）を選び分析した。

### 2. 学生の環境に対する意識と行動

まず、学生の環境に対する意識と行動について考える。

「これまでに環境問題について学んだことがあるか」をまとめたものが表1である。日常生活で地球温暖化や放射能などといった環境問題がこれだけ大きく取り上げられているにもかかわらず、「現在、学習していない」学生が80%も占めることは驚きである。これは学生の責任というよりは、学校はもちろんのこと、社会が環境問題を常に学ぶ機会を学生に与えてこなかったからである。

表2は、学生が「早急に解決されるべきと考える環境問題」の内訳を示したものである。

非常に関心が高い問題は、上位から「地球温暖化(23.0%)」、「大気汚染(20.6%)」、「森林破壊(13.2%)」、「食品添加物(8.2%)」、「ゴミ問題(8.2%)」、「砂漠化(5.8%)」などとなっている。大気環境に関する問題、なかでも地球温暖化に関する諸問題（地球温暖化、森林破壊、ゴミ問題など）の関心が高いことを示している。

しかしながら、表3で、特に「地球温暖化対策を実行できるか」について、「時々ならできる」と「できない」をあわせた割合をみると、必ずしも行動が伴っていないことがわかる。それは、「冷暖房をひかえる」、「できるだけ自家用車を使わない」がそれぞれ45.7%、49.4%を占めることから知ることができる。

また、「低・無農薬野菜や無添加の食品を買う」ことが「時々ならできる」と「できない」をあわせて60.5%

表1：これまでに環境問題について学んだことがあるか

項目	男	女	計	割合
過去にも現在も習っている	9	1	10	12.5
過去に習ったが現在は習っていない	41	23	64	80.0
過去には習っていないが現在は習っている	2	0	2	2.5
習ったことがない	3	1	4	5.0
計	55	25	80	100.0

1：「記入なし」が1名あり。

2：男・女・計についての単位は「人」、また割合の単位は「%」である。

以下のすべての表で同様とする。

表2：早急に解決されるべき環境問題（3つ可）

項目	男	女	計	割合 (%)
大気汚染	36	14	50	20.6
酸性雨	1	0	1	0.4
水質汚染	13	4	17	7.0
ゴミ問題	13	7	20	8.2
オゾン層の破壊	12	5	17	7.0
食品添加物	12	8	20	8.2
騒音問題	2	2	4	1.6
環境ホルモン	5	1	6	2.5
土壌汚染	5	1	6	2.5
森林破壊	18	14	32	13.2
地球温暖化	39	17	56	23.0
砂漠化	12	2	14	5.8
計	168	75	243	100.0

も占めている。国内産の農産物も農薬が多用されているが、輸入食品は国内産にはないポストハーベスト残留の危険性が高いだけでなく、長距離輸送に伴う二酸化炭素の排出量が一層増加（フード・マイレージの増加）すると考えられるので、今まで以上に学生にしっかりと伝え

ていく必要があると考えられる。

さらに、「水の無駄遣いを減らす」および「シャンプーやリンスの量を減らす」に関しては、「できる」の割合がそれぞれ67.9%、72.8%と比較的高くなっているが、学生の意識が水質汚染対策まででとどまっている可能性が大きい。つまり、浄水場および下水処理場の稼働には多量の電力を必要とすることから、水質が悪化すればするほど、二酸化炭素の排出量が増加することについても、学生に確認する必要がある。

### 3. 学生の食生活の実態

では、学生の食生活の実態をみていこう。

「食生活を改善する必要があるか」について、表4は、約80%の学生が食生活を少しでも変える必要があると答えている。

表5と表6は、学生が「決まった時間に食事をするか」、そして「食事を抜くことがあるか」を示したものである。自宅通学者を対象としているにもかかわらず、半数以上が毎日決まった時間に食事をとっていないことがわかる。また食事を抜いている割合のなかで、朝食の欠食率が最も高く、「よく抜く」と「時々抜く」をあわ

表3：地球温暖化対策を実行できるか

項目	実行できる				時々なら実行できる				実行できない			
	男	女	計	割合	男	女	計	割合	男	女	計	割合
冷暖房をひかえる	34	10	44	54.3	14	14	28	34.6	8	1	9	11.1
水の無駄遣いを減らす	37	18	55	67.9	15	7	22	27.2	4	0	4	4.9
シャンプーやリンスの量を減らす	43	16	59	72.8	10	7	17	21.0	3	2	5	6.2
なるべく自家用車を使用しない	27	14	41	50.6	26	11	37	45.7	3	0	3	3.7
低・無農薬野菜や無添加の食品を買う	22	10	32	39.5	32	12	44	54.3	2	3	5	6.2
ゴミが多く出るファストフード店に行く回数を減らす	37	17	54	66.7	16	8	24	29.6	3	0	3	3.7

表4：現在の食生活を改善する必要があるか

項目	男	女	計	割合
大いに改善する必要あり	10	3	13	16.0
少し改善する必要あり	35	16	51	63.0
特に考えていない	11	6	17	21.0
計	56	25	81	100.0

表5：毎食決まった時間に食事をするか

項目	男	女	計	割合
決まった時間にとる	24	16	40	49.4
時々とる（週に3～4日）	23	6	29	35.8
とっていない	9	3	12	14.8
計	56	25	81	100.0

表6：食事を抜くことがあるか

時間帯	よく抜く（6日以上）				時々抜く（3～4日）				抜かない				割合計
	男	女	計	割合	男	女	計	割合	男	女	計	割合	
朝	7	0	7	8.6	14	5	19	23.5	35	20	55	67.9	100.0
昼	0	0	0	0	11	3	14	17.3	45	22	67	82.7	100.0
夜	0	0	0	0	3	3	6	7.4	53	22	75	92.6	100.0

表7：食事を抜く理由

項目	男	女	計
食べる時間がない	18	4	22
作るのが面倒	0	0	0
食欲がない	3	0	3
ダイエットのため	3	1	4
お金を節約するため	4	4	8
習慣になっている	2	2	4
その他	1	1	2

せて、全体の約32%を占めている。そして、表7から、食事を抜く理由をみると、「食べる時間がない」という学生の割合が高く、食習慣が乱れがちであることを知ることができる。規則正しい生活習慣は子どもの頃から身につけることが大切で、食事についても例外ではない。朝食は1日のスタートであり、朝食を摂ることで身体が目覚めるということを忘れないことが必要である。

学生が食生活で気をつけていることは、表8の「食生活での心がけ」から明らかとなる。これをみると、各項目ともおよそ半数以上の学生が気をつけているが、塩分、糖分、脂肪の摂取に気をつけていない学生が非常に多く、ここでも意識と行動との間に大きなギャップをみ

表8：食生活での心がけ

項目	かなり気をつけている				気をつけている				気をつけていない				割合計
	男	女	計	割合	男	女	計	割合	男	女	計	割合	
塩分のとりすぎ	2	0	2	2.5	21	14	35	43.2	33	11	44	54.3	100.0
糖分のとりすぎ	5	2	7	8.6	27	14	41	50.6	24	9	33	40.8	100.0
動物性脂肪のとりすぎ	3	0	3	3.7	20	8	28	34.6	33	17	50	61.7	100.0
栄養バランス	8	4	12	14.8	31	14	45	55.6	17	7	24	29.6	100.0
野菜の摂取	16	10	26	32.1	29	11	40	49.4	11	4	15	18.5	100.0

表9：調理済み食品やインスタント食品の利用度

項目	男	女	計	割合
よく利用（週に6日以上）	4	1	5	6.2
時々利用（週に3～4日）	32	16	48	59.2
ほとんど利用せず	20	8	28	34.6
計	56	25	81	100.0

表11：間食をするか

項目	男	女	計	割合
毎日食べる	10	17	27	33.3
時々食べる（週に3～4回）	38	12	50	61.7
ほとんど食べない	8	6	14	17.3
計	56	25	81	100.0

ることができる。

その結果として、調理済み食品やインスタント食品の利用度が非常に高いことが、表9からうかがえる。その理由として、「調理が簡単」だからというものが大半を占めている（表10）。これらの食品は栄養的に問題があり、また輸入食材の「宝庫」ともいえる食品で、これらに大きく依存することは、地球環境の悪化につながることも気づくことが必要である。

一方で、調理済み食品やインスタント食品をほとんど利用しない学生もあり、その理由として、「栄養に問題がある」とする学生が多いことは注目に値する。

表11は「間食をするか」を、そして、表12は「間食するとすれば、どのような食品を食べているか」を示したものである。

間食する学生が大半で、そのうち約30%が毎日間食すると答えている。間食によく飲食するものとして、上位から、「ジュース類（53.2%）」、「チョコレート類（49.3%）」、「クッキー類（44.2%）」、「アイスクリーム類（44.2%）」と続く。間食として好ましいのは、旬の果物、牛乳、豆、いも類であり、市販食品の場合、脂肪、食塩、砂糖、食品添加物があまり使用されていないものを選ぶことが重要である。特にスナック菓子や清涼飲料の組合せは現代型栄養失調を生み出しているといわれ、

表10：調理済み食品やインスタント食品を利用する理由

項目	男	女	計	割合
調理が簡単	31	14	45	84.9
家族が好む	0	0	0	0.0
経済的	6	2	8	15.1
家で作るよりおいしい	0	1	1	1.9
栄養があるから	0	0	0	0.0
その他	2	2	4	7.5
計	56	25	81	100.0

表12：間食で食べるもの（5つ可）

項目	男	女	計	割合
ケーキ類	17	4	21	7.0
クッキー類	24	10	34	11.3
スナック類	21	5	26	8.6
せんべい類	7	4	11	3.6
和菓子類	6	3	9	3.0
カップ麺	9	1	10	3.3
ファストフード	9	2	11	3.6
チョコレート類	25	13	38	12.6
アイスクリーム類	21	13	34	11.3
あめ類	8	9	17	5.6
菓子パン	16	8	24	7.9
ジュース類	31	10	41	13.6
果物	8	6	14	4.6
その他	1	1	2	0.7
計	203	99	302	100.0

この両者で簡単に油漬け、砂糖漬けにできるといわれている飲食料品である。スナック菓子は栄養分がほとんど含まれておらず、輸入食材の代表でもある遺伝子組み換え食品の不安もあり、危険な食品添加物が多く使用されている。

チョコレートも、「生チョコ」、「準チョコ」ではなく、原材料表示のはじめに「カカオマス」、「ココアバター」とかかかれている本物のチョコレートを選んでいるかどうかや着色料が多く使用されているものを避けているかどうか目される点である。

表13は「食品の消費期限（賞味期限）経過後の処置」を示しているが、25.0%がそのまま捨てていることがわかる。食べないで廃棄しない、ゴミにしないためには、大人はもちろん子どものときから作った人への感謝の念を忘れないことが必要である。また日本が60%もの食料を輸入品に依存していること、廃棄物が焼却処分される時の温室効果ガスの排出にも考えをめぐらせる必要がある。環境教育の重要性を示す事柄である。

表13：食品の消費期限（賞味期限）経過後の処置

項目	男	女	計	割合
そのまま捨てることが多い	14	6	20	25.0
見た目やにおいで判断することが多い	38	19	57	71.3
答えなし	3	0	3	3.7
計	55	25	80	100.0

「記入なし」が1名あり。

#### 4. 学生の食の安全性に対する意識と行動

表14は、「食の安全性についての関心度」を示している。これを見ると、「食の安全性」について、「関心がある」と「少し関心がある」をあわせて約90%にもなることから、学生は食の安全性については、かなり高い関心をもっていることがうかがえる。

次に、食の安全性で、学生が最も心配していること、また食品を購入する際、重視していることは何かみておきたい。

学生が「食の安全性について最も心配していること」を表15からみると、「異物の混入（25.9%）」や「食中毒（18.5%）」、「食品添加物（17.3%）」となっている。いずれも大きな問題であることはたしかである。特に食中毒の予防には手を洗うことが必要であり、その習慣を身につける必要がある。

しかし、先にみたように、地球温暖化への関心が高いわりに、「残留農薬（7.4%）」や「遺伝子組み換え（12.3%）」についての関心はあまり高くない。また表16からもわかるように、購入時に「値段（34.6%）」を重視し、「国産品か輸入品か（11.1%）」について関心がそれほど高いとはいえないことから、フード・マイレージ等について学んでこなかったと思われる。今後の環境教育における主要な課題のひとつである。

表14：食の安全性についての関心度

項目	男	女	計	割合
関心がある	20	8	28	34.6
少し関心がある	28	16	44	54.3
関心がない	8	1	9	11.1
計	56	25	81	100.0

表15：食の安全性について最も心配していること

項目	男	女	計	割合
残留農薬	5	1	6	7.4
遺伝子組み換え	6	4	10	12.3
容器などの成分の溶け出し	2	0	2	2.5
食中毒	10	5	15	18.5
食品添加物	9	5	14	17.3
残留抗生物質	0	0	0	0.0
異物の混入	18	3	21	25.9
狂牛病など	1	5	6	7.4
寄生虫	4	1	5	6.2
その他	1	1	2	2.5
特になし	0	0	0	0.0
計	56	25	81	100.0

表16：食品購入時に重視すること

項目	男	女	計	割合
値段	21	7	28	34.6
日付	13	5	18	22.2
作った会社の名前	1	1	2	2.5
味	14	5	19	23.4
栄養剤	0	0	0	0.0
見た目	1	1	2	2.5
食品添加物の有無	0	0	0	0.0
国産品か輸入品か	4	5	9	11.1
新商品	0	0	0	0.0
その他	2	1	3	3.7
計	56	25	81	100.0

表17：食品購入時に食品表示を見るか

項目	男	女	計	割合
必ず見る	4	4	8	10.0
時々見る	28	12	40	50.0
見ない	23	9	32	40.0
計	55	25	80	100.0

「記入なし」が1名あり。

表18：食品表示を信頼しているか

項目	男	女	計	割合
大いに信頼している	10	3	13	16.3
多少は信頼している	33	21	54	68.0
あまり信頼していない	11	1	12	15.0
まったく信頼していない	1	0	1	0.7
計	55	25	80	100.0

「記入なし」が1名あり。

では、食品購入時に、どれだけの学生が「食品表示を参考にしている」だろうか。またどれだけ「信頼しているか」を、表17、表18からみてみよう。表示を「時々見る」と「見ない」をあわせると約90%を占め、表示を「大いに信頼している」と「多少は信頼している」をあわせると80%を超えることから、食品表示を信頼してよいかどうかは別として、かなりの学生が食品表示に信頼を寄せていることがわかる。

しかし、これほど食品表示に対して信頼を寄せながらも、表19のように、「今後、食品表示偽装が減少すると考えるか」の質問には、「そうは思わない」が約74%も占めることがわかった。表20は、「食品を選び方」をまとめたものである。頻繁に起こる食品表示偽装によって、「食品の安全性に関する報道に注意するようになった(32.1%)」、「より安心できる業者を選ぶようになった(23.5%)」などのように意識が向上している部分もある。しかしながら、「特に変わっていない(30.9%)」が相当数存在することは非常に懸念される。したがって、今後、私たちは受け身の姿勢ではなく、食品表示偽装を見破る力を養うことが求められているといえる。

また表21は、「農と食」についての意識について質問したものだが、ここでも「食は大事だが、日々忙しいため、安ければそれでよい(37.0%)」と「特別なことはしていない(29.6%)」とあわせて約70%にもものほり、環境教育および食育の重要性がはっきりとわかる結果となった。

表19：食品表示偽装が減少すると考えるか

項目	男	女	計	割合
そう思う	9	1	10	12.3
そうは思わない	39	21	60	74.1
答えなし	8	3	11	13.6

表20：食品表示偽装問題後における食品の選び方(いくつでも可)

項目	男	女	計	割合
自分の目や舌でも判断するようになった	3	2	5	6.2
業者やブランドだけに頼らなくなった	9	4	13	16.0
より安心できる業者を選ぶようになった	13	6	19	23.5
産地や流通経路がはっきりしているものを選ぶようになった	8	5	13	16.0
食品の安全性に関する報道に注意するようになった	19	7	26	32.1
食品の安全性について勉強するようになった	2	1	3	3.7
食品の安全性にこだわってもしかたがないと思うようになった	4	2	6	7.4
その他	1	0	1	1.2
特に変わっていない	17	8	25	30.9
答えなし	0	0	0	0.0

「記入なし」が1名あり。

表21：「農と食」についての意識

項 目	男	女	計	割合
安全なら高くても買うし、虫がついていても平気で、農家を支援する活動にも参加	8	1	9	11.3
食生活に注意し、青空市場などもよく利用	10	7	17	21.3
食は大事だが、日々忙しいため、安ければそれでよい	21	9	30	38.0
特別なことはしていない	16	8	24	29.4
計	55	25	80	100.0

## 成果と今後の課題

上記の結果、今後、積極的に食育を推進するとともに、環境保全教育の必要性について痛感させられる結果が得られた。

多くの学生にとって、環境問題を学習する機会が非常に少ないことが、何よりも問題である。学校はもちろん社会が一丸となって、環境学習を今以上に積極的に進める必要があることを示している。

現在、日本の国土が荒廃しつつある。このことは地球温暖化にも拍車をかけている。この主要な原因のひとつが、私たちの食生活にある。それらは、1980年以降、それまで模範とされていた私たちの食生活（日本型食生活）が、「洋風化」、「多様化」、「簡便化」、「外部化」が進んで、激変したことによって起きている。つまり、①畜産物・油脂類を多く食べるようになったこと、②西洋野菜や中国野菜がごくふつうの存在になり、またハウス栽培の普及で、多くの野菜が旬の時期以外にも出回るようになったこと、③加工食品や調理済み食品を日常的に使うようになったこと（食べることを以外にしたいことがたくさんある現代人は食材の購入から調理、食事、食器洗い、食べ残しの廃棄に至る一連の過程をできるだけ簡略化しようとする）、④世界中からおいしいもの、珍しいものが恒常的に輸入されるようになったこと、である。

大量の安価な輸入食材に依存した大量生産・大量消費を支えるシステムができあがるとともに、こうした「農と食の乖離」によって、消費者の農や食に対する意識の低下へとつながり、食品の安全性に対する懸念や食品ロスとよばれる大量廃棄の問題が急浮上することになった。

その結果、1980年代から先進諸国では共通して、自分の栄養バランスをコントロールできない、規則正しい食生活をおくれない、といった生活習慣病が顕在化している。一方で、安価で豊富な輸入農水産物に圧迫されて、日本農業は担い手が不足して耕作放棄地が出現するなど、衰退の一途をたどっている。「農の多面的機能」が失われ、国土が荒廃しつつあるのである。さらにフード・マイルージの増大と大量の食品廃棄物の焼却のため

に、二酸化炭素の排出に拍車をかけ、地球温暖化が加速している。また食品廃棄物のたれ流しは水質をひどく汚染するため、私たちは安全な水を飲めなくなるとともに、浄水場や下水処理場の一層の稼働によって、二酸化炭素の排出量が増大することにつながっている。

したがって、輸入に大きく依存した私たちひとりひとりの食生活を変えることが、地産地消などの効果によって、安全・安心な食を手に入れることにつながって健康を改善するとともに、国内農業が活性化して国土を保全することになる。つまり、食生活の改善が国土環境の保全に直結していることを、筆者たち教育者はしっかりと伝えていく使命がある。

このことは他の国々にもあてはまる。世界各国が民族自立の基礎である食料自給率の向上に努め、そのある程度の達成の上に立って初めて、真の意味での経済の国際化が可能となる。私たちの浪費型の生産・消費のスタイルを改め、途上国の資源収奪に依存した大量生産・大量消費・大量廃棄の構造を転換していかなければならない。日本農業の発展を図ることは、輸出国の土地資源の劣化を防ぎ、環境汚染をなくし、さらに途上国の貧困をなくすことになる。これこそが真の国際貢献であろう<sup>1)</sup>。

本稿は、自宅通学生が対象であり、限界があることが否めない。自宅外通学生については、今後の課題とした。

### (注)

- 1) 酒井惇一『農業資源経済論』（農林統計協会、1995年、p.202）

### 引用・参考文献

- 幕内秀夫『ああ、かんちがい 子どもの食事 Q&A』（学習研究社、2002年）  
 服部幸應『大人の食育』（日本放送出版協会、2004年）  
 足立己幸監修『子どもの栄養と食育がわかる事典』（成美堂出版、2008年）  
 酒井惇一『農業資源経済論』（農林統計協会、1995年）  
 今井清一・今井良一『環境教育論—現代社会と生活環境—』（鳥影社、2014年）  
 今井良一『改訂増補版 環境教育学と地理学の接点』（ブイツーソリューション、2015年）

（いまい りょういち・関西学院大学非常勤講師）